

巻頭言

新学習指導要領と教育課程の編成について

県教育庁教育振興部学習指導課 指導主事 粕谷 真由美

新学習指導要領(平成30年3月告示)数学科の目標

数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 数学における基本的な概念や原理・法則を体系的に理解するとともに、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けるようにする。
- (2) 数学を活用して事象を論理的に考察する力、事象の本質や他の事象との関係を認識し統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力を養う。
- (3) 数学のよさを認識し積極的に数学を活用しようとする態度、粘り強く考え数学的論拠に基づいて判断しようとする態度、問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとする態度や創造性の基礎を養う。

今年の3月30日に高等学校の新しい学習指導要領が告示され、平成34年度から年次進行により実施となる。今回の改訂では、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」が重視されている。その実現を図り、新しい時代に必要となる資質・能力の育成を目指すに当たって、まず「何ができるようになるか」が明確化され、すべての教科の目標及び内容が三つの柱で再整理された。上記「数学科の目標」も、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理されている。そして、その三つの柱が偏りなく実現されるよう、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。

高等学校教育、特に数学科は大学入学者選抜に向けた対策が動機付けとなり、小・中学校に比べ知識伝達型の授業にとどまりがちであり、教育課程もその影響をうけやすい。今回の改訂は、高大接続改革という、高等学校教育を含む初等中等教育改革と、大学教育改革、そして両者をつなぐ大学入学者選抜の一体的改革の実施の中で行われる改訂である。今年6月に独立法人大学入試センターから出された「大学入学共通テスト(現高校1年生から実施)」における問題作成の方向性の一つとして、『「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視する』とある。7月には文部科学省から新学習指導要領の数学、理数についての解説が出されており、明日の授業からでも使えそうな例が多数掲載されている。ぜひ授業改善の参考にしていきたい。

新学習指導要領の総則等については来年度から移行措置が始まり、再来年度には新しい教育課程を仮提出していただく予定である。授業改善とともに、教育課程の編成に当たり、各学校における教育目標を踏まえた「カリキュラム・マネジメント」の実現に数学科としてどう関わっていくか、検討を進めていきたい。

終わりに、数学部会の事務局及び会員の皆様による、数学教育の改善・充実に向けた熱意ある取組に感謝するとともに、数学部会誌「 $\alpha - \omega$ 」が一層充実・発展し、今後とも多くの先生方の研修の一助となり、日々の実践に活用されることを祈念しております。